

Synopsis

美術館で映画を「読む」、刺激的な体験

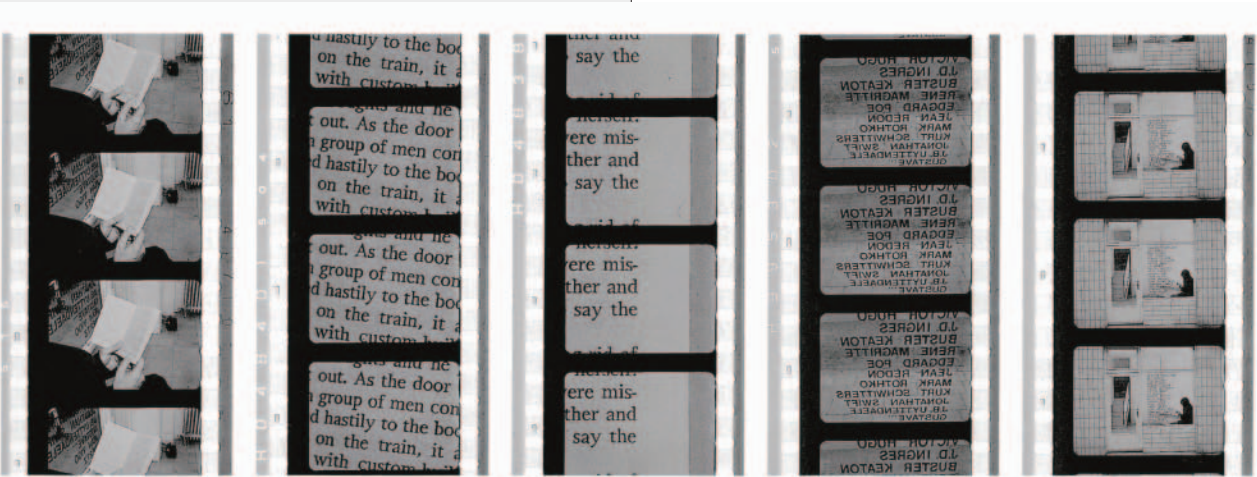
映画をめぐる美術。「映画」そのものではなく、映画をめぐる「美術」。このタイトルが指し示す展覧会とは、いったいどんなものか。まずは英語のタイトル「Reading Cinema, Finding Words（映画を読む、言葉を探す）」が、ひとつのヒントになるかもしれません。映画とは見る（そして聴く）ものだ、というのが普通だとして、この展覧会では、映画を「読む」ことが問題になります。

では、ここで言う「映画を読む」とはどのような行為か。次にヒントになるのが、サブタイトルの「マルセル・ブロータースから始める」です。マルセル・ブロータースとはベルギー出身の芸術家の名です。オブジェや写真・短編映画の制作、著述活動など幅広い創作を展開したブロータースは、1960年代半ばから70年代半ば、戦後美術の転換期に唯一無二の存在感を示しました。

この展覧会がブロータースから始まるのは、彼が、自身の映画を言語の拡張として捉えていたことによります。もともと詩人として出発したブロータースが最終的に映画に行き着いたのは、映画の「動く像（moving image）」という特質を、言語にないものとして重視したからではないようです。ブロータースの映画の特徴は、普段は当たり前すぎて気にも留めない言葉やイメージが、不透明で見慣れぬ、

ノンセンスなものとして立ち現れてくることにあります。そのような事態を前に私たちは、言葉とイメージの間、言葉と言葉の間、そしてイメージとイメージの間を跳躍し、自らそこに接続線を引くような行為、すなわち映画を「読む」ことへと誘われていきます。

本展覧会は、ユーモラスかつエレガントな振る舞いで、言葉とイメージの関係を浮かび上がらせるブロータースの実践を手がかりに、現在、国際的に活躍する美術家13名のフィルム、写真、ビデオ、インスタレーション等の作品を読み解いてみようという試みです。美術館で映画を読む、それはきっと刺激的な体験になることでしょう。



マルセル・ブロータース《ケルンでの犯罪》1971年 Courtesy of Estate Marcel Broodthaers, Brussels, © Estate Marcel Broodthaers

展覧会名 | 映画をめぐる美術——マルセル・ブロータースから始める
Reading Cinema, Finding Words: Art after Marcel Broodthaers

会期 | 2014年4月22日〔火〕－6月1日〔日〕〔36日間〕

開館時間 | 10:00－17:00（金曜日は－20:00）＊入館は閉館30分前まで

休館日 | 毎週月曜（5月5日は開館）、5月7日〔水〕

主催 | 東京国立近代美術館、京都国立近代美術館

会場 | 東京国立近代美術館 企画展ギャラリー（1階）

アクセス | 東京メトロ東西線竹橋駅 1b 出口 徒歩 3 分 〒102-8322 東京都千代田区北の丸公園 3-1

観覧料 | 一般 850（600）円、大学生 450（250）円（ ）内は 20 名以上の団体料金、いずれも消費税込。

＊高校生以下および 18 歳未満、障害者手帳をお持ちの方とその付添者（1 名）は無料。

＊上記料金で入館当日に限り、同時開催の「特集 地震のあとで：東北を思うⅢ」、所蔵作品展「MOMAT コレクション」もご覧いただけます。

リピーター割引 | **2 回目はお得！**
本展使用済入場券をお持ちいただくと、2 回目は特別料金（一般 430 円、大学生 130 円）でご覧いただけます。

お問い合わせ | 03-5777-8600（ハローダイヤル）

HP | <http://www.momat.go.jp/Honkan/readingcinema/index.html>

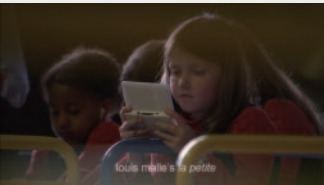
記者内見会 | 2014 年 4 月 21 日〔月〕 13:30－14:45（14:00 より記者発表を行います）

同時開催 | 所蔵作品展「MOMAT コレクション」（4－2 階）、
「特集 地震のあとで：東北を思うⅢ」ギャラリー 4（2 階）
2014 年 4 月 15 日〔火〕－6 月 1 日〔日〕

※本展は、京都国立近代美術館にて
2013 年 9 月 7 日－10 月 27 日まで
開催された展覧会の巡回です。

「映画をめぐる美術——マルセル・ブロータースから始める」
報道関係お問い合わせ先：東京国立近代美術館 企画課
e-mail pr@momat.go.jp / tel 03-3214-2561(代表) / fax 03-3214-2576

Special Event



ドミニク・ゴンザレス＝フォールステル《ロミリー》2012 年



ミン・ウオン《ペトラ・フォン・カントとドイツ語を学ぶ3》2007 年

▼連続ギャラリー・トーク

深田 晃司（映画監督）
| 4 月 26 日〔土〕14:00－15:00
牧口 千夏（京都国立近代美術館研究員・本展企画者）
| 5 月 3 日〔土〕14:00－15:00
ダヤニータ・シン（出品作家）
| 5 月 10 日〔土〕14:00－15:00
岡田 秀則（東京国立近代美術館フィルムセンター主任研究員）
| 5 月 31 日〔土〕14:00－15:00

場所 | いずれも企画展ギャラリー（1 階）
参加無料、申込不要、要観覧券

▼金曜のタベの特集上映

特集 | ドミニク・ゴンザレス＝フォールステル
日程 | 4 月 25 日〔金〕、5 月 9 日〔金〕、5 月 23 日〔金〕
上映作品 | 「最初から [De Novo]」（2009 年）／「ノーリターン [No Return]」（2009 年）／「ロミリー [Romilly]」（2012 年）／「Belle comme le jour」[トリスタン・ベラとの共作]（2012 年）／「アトミック・パーク [Atomic Park]」（2004 年）

特集 | ミン・ウオン
日程 | 5 月 2 日〔金〕、5 月 16 日〔金〕、5 月 30 日〔金〕
上映作品 | 「不安を食いつくす [Angst Essen / Eat Fear]」（2008 年）／「ペトラ・フォン・カントとドイツ語を学ぼう [Learn German with Petra Von Kant]」（2007 年）／「明日、発ちます [Devo partir. Domani / I must go. Tomorrow.]」より「母」（2010 年）／「コンタクトホープ [Kontakthope]」（2010 年）／「メイキング・チャイナタウン [Making Chinatown]」より抜粋（2012 年）

時間 | いずれも 18:30－19:30
場所 | いずれも企画展ギャラリー（1 階）
無料、申込不要、要観覧券



Introduction

チーズを口にぐわえた樹の上のカラス。その声をほめそやす樹下の狐のお世辞に乗せられて、思わずカラスは口を開く。チーズはまんまと狐の手に。狐：「ごますりの生はすべて、ごますりを真に受ける者のおかげ。この教訓は、チーザー切れの価値がある。」17 世紀フランスの詩人ラ・フォンテーヌの詩篇「カラスと狐」である。しかし、そのタイトルが付されたこの映像作品に登場するのは、靴、コップ、花、電話機といったオブジェ、それに切り抜かれた男の顔や頬杖をつく少女の写真、そして文字の羅列…。果たして「カラスと狐」は何を意味する？ 数かれた伏線、意味ありげな言葉、さまざまな事物の断片。読み解こうとする私たち。それを覆す作品たち。美術館を舞台に繰り広げられる、読み解きと裏切りの連続！

マルセル・ブロータース《カラスと狐》（部分）1967-72 年 Courtesy of Estate Marcel Broodthaers, Brussels, © Estate Marcel Broodthaers

映画をめぐる美術——マルセル・ブロータースから始める
Reading Cinema, Finding Words: Art after Marcel Broodthaers
2014 年 4 月 22 日（火）－6 月 1 日（日） 東京国立近代美術館 企画展ギャラリー「1 階」

主催：東京国立近代美術館、京都国立近代美術館

Cast

国際的に活躍する13作家が登場。美術館を舞台に、「映画をめぐる」作品が展開されます。

※番号がついている画像が、広報用貸出画像になります。

シンディ・シャーマン（1954ー）



《アンタイトルド・フィルムスティル #05》1977年
Courtesy of Cindy Sherman and Metro Pictures © Cindy Sherman

アメリカ出身。1970年代後半から、映画に登場する女優に扮したセルフ・ポートレート写真のシリーズ〈アンタイトルド・フィルムスティル〉を発表して注目を集め、現在もお、後進世代の作家に多大な影響を与え続けている。近年では2012年から13年にかけて、ニューヨーク近代美術館ほか全米各地の美術館を巡回した個展が開催された。

ダヤニータ・シン（1961ー）



① 《ファイル・ルーム》2013年 © Dayanita Singh

インド出身。1980年代からフォト・ジャーナリストとして活動を開始。近年は、撮りためた膨大な量の写真アーカイヴのなかから、いくつかの写真を組み合わせて新たな物語を紡ぐという手法をとり、『Go Away Closer』、『Blue Book』ほか数多くの写真集をドイツの出版社シュタイデルと共同で制作している。

マルセル・ブロータース（1924ー1976）



《シネマ・モデル》1970年[2010年、マリアン・グッドマン・ギャラリー、ニューヨークでの展示風景]
Courtesy of Marian Goodman Gallery, Paris/New York Photo: Ellen Page Wilson © Estate Marcel Broodthaers

ベルギー出身。1940年代からシュルレアリスムの詩人グループに参加。1964年頃から美術の領域に身を置き、言語とイメージの関係を扱ったオブジェや写真・短編映画の制作、公開書籍や出版などの著述活動、美術を取り巻く制度を批判的に検証するプロジェクトなど幅広い創作を展開し、1960年代から70年代の戦後美術の転換期に重要な足跡を残した。

アイザック・ジュリアン（1960ー）

イギリス出身。1990年頃からポストコロニアル理論や映画論の研究を通して、人種やグローバリゼーションなどの問題を批判的に考察したマルチスクリーンの大型ビデオ・インスタレーション、フィルム、写真作品などを発表。2001年のターナー賞にノミネートされたほか、世界各国の美術館における数多くの個展やグループ展、国際展にも出品。



《アフリカの亡霊》2005年 Courtesy the artist and Victoria Miro, London © Isaac Julien

ピエール・ユイグ（1962ー）

フランス出身。1990年代から、映画の構造を利用してフィクションと現実の関係を探るビデオ作品や、美術館、展覧会、近代建築、あるいは著作権や祭事などに潜む制度に注目したプロジェクトを発表。近年では、ボンビドゥー・センター（2013）での個展で、犬や蜂といった生き物を含むインスタレーションを発表し、話題となった。



② 《第三の記憶》1999年 © Pierre Huyghe, courtesy Marian Goodman Gallery, Paris/New York

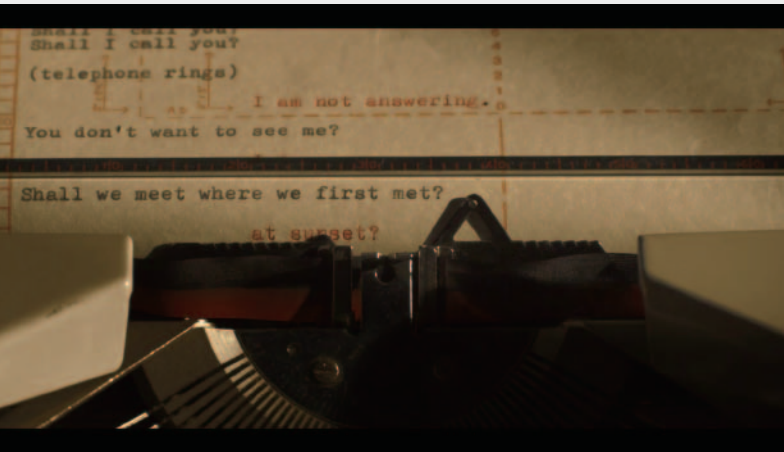
アナ・トーフ（1963ー）

ベルギー出身。映画や文学、手記、記録文書など既存のテキストから出発し、テキストとイメージの関係をテーマに置き、それらの視覚化や翻訳、音声化のプロセスをフィルムや写真作品として提示する。主な個展に、デュッセルドルフ州立美術館 K21（2010）、ディア美術財団（2004、ニューヨーク）など。



③ 《偽った嘘について》2000年[2007年、アントワープ現代美術館での展示風景]
アントワープ現代美術館蔵 Courtesy Museum of Contemporary Art, Antwerp (M HKA)
© photo: Ana Tóth

アクラム・ザタリ（1966ー）



④ 《明日にはすべてうまくいく》2010年 Courtesy of Thomas Dane Gallery, London © Akram Zaatari

レバノン出身。イメージとその背景にある歴史や記憶との結びつきを解明するプロセスを捉えた写真やフィルム、ビデオ、インスタレーション、パフォーマンスを手がける。主な個展に、ニューヨーク近代美術館 Project 100（2013）、シカゴ現代美術館（2012-13）、リバプール・ビエンナーレ（2012）など。

ミン・ウォン（1971ー）

シンガポール出身。2000年代から、パゾリーニ、ウォン・カーウアイなどのワールドシネマの登場人物に自ら扮して再解釈したヴィデオ・インスタレーションを制作し、人種的・文化的アイデンティティ、ジェンダーや言語といった問題を扱ってきた。ヴェネツィア・ビエンナーレ（2011）のシンガポール館で個展を開催、審査員特別表彰を受賞。



⑤ 《Filem-Filem-Filem》2008-10年
Courtesy of the Vitamine Creative Space, Guangzhou, China © Ming Wong

ドミニク・ゴンザレス＝フォルステル（1965ー）



《無題（映画について）》2013年 Courtesy of Corvi-Mora, London © Dominique Gonzalez-Foerster

フランス出身。1990年代から、文学や映画、近代建築などを着想源に、現実と虚構のあわいへと観客を誘うインスタレーションやフィルム、ヴィデオ作品を発表。主な個展にテート・モダン（2008）、パリ市立近代美術館（2007）のほか、ヴェネツィア・ビエンナーレ（2003、2009）、ドクメンタ11（2002）などの国際展にも数多く参加。

やなぎみわ（1967ー）

兵庫県出身。1993年発表の写真シリーズ〈エレベーター・ガール〉で注目を集める。以後、ジェンダー、老い、生と死、自己と他者との関係性をテーマとしながら現代社会に生きる様々な女性のありようを作品化してきた。主な個展に、東京都写真美術館・国立国際美術館（2009）、ドイツ・グッゲンハイム美術館（2004）など。



《グローリア＆レオン》2004年 © Miwa Yanagi

エリック・ボードレール（1973ー）



⑥ 《重信房子、メイ、足立正生のアナバシス、そして映像のない27年間》2011年
カディスト美術財団蔵 Courtesy of Kadist Art Foundation © Eric Baudelaire

アメリカ出身。パリを拠点に、実際の出来事とイメージの関係や、記録とナラティヴの関係をテーマに写真やフィルム、版画、インスタレーションを制作。主な展覧会にハマー美術館（2010、ロサンゼルス）やシャルロワの写真美術館（2007、ベルギー）での個展や、第8回台北ビエンナーレ（2012）など。

アンリ・サラ（1974ー）

アルバニア出身。1990年代末頃から、旧社会主義国家出身という出自を背景にした政治色の強い映像作品を発表。近年では、音と空間、建築との関係性に焦点を当てた映像や立体、写真作品などを制作している。ボンビドゥー・センター（2012）、国立国際美術館（2011）など世界各国で多数の個展開催。ヴェネツィア・ビエンナーレ（2013）のフランス館代表。



⑦ 《インテルヴィスタ》1998年 © Anri Sala

田中功起（1975ー）



《ひとつの詩を5人の詩人が書く（最初の試み）》2013年 © Koki Tanaka

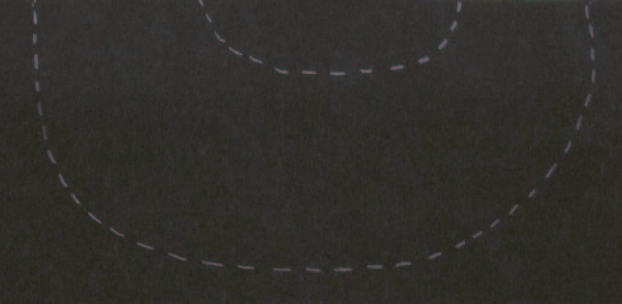
栃木県出身。日常のシンプルな行為に潜む複数のコンテクストを視覚化／分節化するような、映像や写真、パフォーマンスなどを発表。近作では、特殊な状況に直面する人びとが見せる無意識の振る舞いや反応を記録し、日頃見過ごしている物事のオルタナティブな側面を示そうとしている。ヴェネツィア・ビエンナーレ（2013）日本館代表（特別表彰受賞）。

Theater

「シネマ・コンプレックス」がテーマの、これまでにない会場構成

展覧会は、まずブロータースの部屋から始まります。この部屋にあるいくつかの穴は、カーテンに囲まれた長い廊下の入り口になっていて、それぞれフィルムやビデオ、写真の分野で活躍する美術家の部屋へ通じています。そしてこの廊下を戻って、またブロータースの部屋から始まります。参照軸となるブロータースの部屋とそれぞれの美術家の部屋を「めぐる」経験は、いったん切り離され引き伸ばされて、作品世界へ深く入り込んでいけるような配置になっています。

〔会場デザイン〕西澤徹夫（西澤徹夫建築事務所）



「これは映画というよりは読書にも似た感覚であり、見る者の意識を映像と言語的意味の行間に導いていく。」
池上司（西宮市大谷記念美術館学芸員）／「日本経済新聞」（2013年10月1日付夕刊）より

Review

2013年に京都国立近代美術館で開催時のレビュー記事より

「マルセル・ブロータースの部屋は、16ミリ映写機6台で彼の映像作品がカタカタ上映され続けているが、この部屋を見るためだけでも展覧会を訪れる価値はある。」
福永信（小説家）／「INITIATORS」BLOGS（2013年09月24日）」（ウェブサイト「REAL KYOTO」内）より URL：http://reallykoto.jp/blog/tanaka_koki_correspondeces_no1/

「美術の側からのこうした映画へのアプローチは、娯楽産業の内側で守られてきた映画の存立基盤を揺さぶる。」

岡田秀則（東京国立近代美術館フィルムセンター）／「逆立ちする映画、存在しない果実の汁」『視る』第468号（京都国立近代美術館、2014年）より